

Researches into the Origin of the Mounted Nomads in the Eastern Eurasian Steppes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Takahama, Shu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050061

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



KAKEN

2006

37

ユーラシア草原地帯東部における 騎馬遊牧文化の成立に関する研究

課題番号 15401025

平成 15 年度～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））

研究成果報告書



平成 18 年 3 月

研究代表者

高 濱 秀

（金沢大学文学部教授）

金沢大学附属図書館



8311-52076-3

目 次

1. 研究組織	1
2. 研究経費	1
3. 研究発表	2
4. 研究成果による工業所有権の出願・取得状況	2
5. 研究成果の概略	3
6. Preliminary Report of the Archaeological Investigations in Mongolia, 2003	11
7. Preliminary Report of the Archaeological Investigations in Mongolia, 2004	37
8. Preliminary Report of the Archaeological Investigations in Mongolia, 2005	63

金沢大学附属図書館



8311-52076-3

発 行 者 寄 贈

1. 研究組織

研究代表者：高濱秀（金沢大学文学部教授）
研究分担者：林俊雄（創価大学文学部教授）
研究分担者：川又正智（国士舘大学文学部教授）
研究分担者：松原隆治（星城大学経営学部助教授）
研究分担者：本郷一美（京都大学霊長類研究所助手）
研究協力者：篠原徹（国立歴史民俗博物館教授）
研究協力者：畠山禎（横浜ユーラシア文化館学芸員）
研究協力者：山田真弓（横浜市役所）
研究協力者：柳生俊樹（金沢大学社会環境科学研究科大学院生）
研究協力者：高見哲士（金沢大学文学研究科大学院生）
研究協力者：諫早直人（京都大学文学研究科大学院生）
研究協力者：田中裕子（早稲田大学文学研究科大学院生）
研究協力者：相馬拓也（早稲田大学文学研究科大学院生）

2. 研究経費

交付決定額（配分額）

	直接経費	間接経費	合計
平成15年度	4,400,000 円	0	4,400,000 円
平成16年度	4,000,000 円	0	4,000,000 円
平成17年度	4,500,000 円	0	4,500,000 円
総計	12,900,000 円	0	12,900,000 円

3. 研究発表

口頭発表

TAKAHAMA Shu “Excavation of a Khereksur in Ulaan Uushig I”

At the First International Symposium “Early Bronze and Iron Age in Mongolia;
Archaeology and Anthropology Perspective” 2005.07.26

MATSUBARA Ryuji and YAGYU Toshiki “Drawing of the Plan of the Stone Mound and
Kite Aerial Photography using the Digital Camera”

At the First International Symposium “Early Bronze and Iron Age in Mongolia;
Archaeology and Anthropology Perspective” 2005.07.26

HAYASHI Toshio “Khereksurs and Kurgans with “Moustache” in the Tianshan and
the Altai”

At the First International Symposium “Early Bronze and Iron Age in Mongolia;
Archaeology and Anthropology Perspective” 2005.07.26

4. 研究成果による工業所有権の出願・所得状況

なし

5. 研究成果の概略

1. はじめに

ユーラシア草原地帯の東部は、初期騎馬遊牧民文化の起源を研究する上に、近年ではますますその重要性を増しつつある。

1970年代頃まで、黒海沿岸のスキタイに代表される初期騎馬遊牧民文化の起源については、スキタイの西アジアへの侵入を契機として西アジアにおいて形成されたものとする説が有力であった。東カザフスタンのチリクタのような、東方における古い時期の初期遊牧民文化の遺跡の発見はあったとはいえ、イランのジヴィエにおける、古い時期のスキタイ文化と考えられる遺物の発見は、かなりの重みを持っていたのである。しかしジヴィエ発見とされる遺物の信頼性が揺らぎ始め、黒海沿岸地域において先スキタイ文化の研究が盛んになり、また1971年から74年にかけてシベリア、トゥバのアルジャン古墳が発掘されるようになって、初期騎馬遊牧民文化の東方起源説が有力になってきた。多くの発見や発掘によって黒海沿岸における先スキタイ文化から初期スキタイ文化への交代の様相が明らかになってくるにつれて、スキタイ文化の形成に重要な役割を果たす要素が、先スキタイ文化の中にはないことが、知られてきたのである。

一方草原地帯東方においては、アルジャン古墳が初期騎馬遊牧民文化の最も早い古墳であると考えられるようになってきた。出土した鍬や馬具が先スキタイ時代のものと類似することから、年代は黒海沿岸の先スキタイ文化に相当すると考えられるが、それに加えて完全に完成した形の動物紋様も出土したからである。また中国の北辺東部に分布する夏家店上層文化には、動物紋様などの初期騎馬遊牧民文化に共通する要素が認められるが、その年代は西周時代後期から春秋時代前期、すなわち黒海沿岸の先スキタイ期に相当することが明らかになってきた。このように草原地帯東方におけるこの時期の様相が注目されるようになってくると、まだ調査の比較的行き届いていないモンゴル高原の状況が問題になってくる。

モンゴル高原においては、鹿石と呼ばれるものが知られている。高1～3mほどの方柱状の石に鹿などの図像を彫りこんだもので、その鹿の図像から初期騎馬遊牧民文化とのつながりが早くから考えられていたが、E.ノヴゴロドヴァの研究の結果、鹿とともに彫りこまれた剣や戦斧などの武器が中国北辺のものと類似し、商代、西周時代、あるいは夏家店上層文化に並行する時期のものと考えられるに至った。前2千年紀の後葉から前1千年紀前葉ということになる。鹿石はモンゴル高原において最も多く発見され、すでに500個を超えている。またザバイカリエ、アルタイ、新疆ウイグル自治区、ウラル地方、北カフカス、黒海北岸からも少数発見され、北カフカス出土のものは、先スキタイ時代の古墳に伴っていた。アルジャン古墳からも鹿石の一種の破片が発見されており、アルジャン古墳自体よりも古い時期のものとも考えられている。このようにして鹿石は初期騎馬遊牧民文化の始まりの頃と強い関係を持つことが推測されるようになってきた。

一方、モンゴル高原においては、青銅器時代の遺構として、ヘレクスルおよび板石墓が知られている。ヘレクスルとは、積石塚を方形あるいは円形の石列で囲ったもので、多くの場合、主にその東側に石堆が複数置かれ、さらにその外側に全体を囲むようにして、数個の石からなる小型ストーンサークルを何重にも配置することもある。また中央の積石塚から東側に角状の突起が出ることもあり、また積石塚から外側の囲いにかけて石列がわたされることもある。ここではヘレクスルを青銅器時代の遺構として紹介したが、発掘しても遺物の出土例がほとんどないところから、その年代には異説もあり、その用途についても、墓という説が定説になったとはまだ言いがたい。しかし初期騎馬遊牧民文化の時代になって、ユーラシア草原地帯に突然出現する大型墳丘墓の先蹤としてヘレクスルを考えることは、きわめて自然なことである。

板石墓はモンゴル高原では比較的東部に分布している。またモンゴルの北側に位置するザバイカリエにおいても多く見られる。これは板石を立てるようにして方形の墓域を区画し、中央の土壇に遺体を安置して、石を以って覆うものである。板石墓からは青銅器や土器も発見されており、青銅器時代

から初期騎馬遊牧民文化の時期のものと考えられている。板石墓から出土する青銅器の中には、中国北辺の夏家店上層文化あるいはその少し後の時期の燕山地域の遊牧民文化の墓から出土する青銅器と共通するものがある。

ヘレクスルと板石墓の関係については、ヘレクスルのほうが早いと考えられている。ザバイカリエにおいて研究を進めているツビクタロフは、ヘレクスルの周囲の石列の上に板石墓が載っていた事例を報告している。

2. 今回の研究に至る過程

上述のように、近年、初期騎馬遊牧民文化の研究においてモンゴル高原の調査が大きな重要性を持つと考えられるようになってきた。我々草原考古研究会ではモンゴル高原の考古学調査を企画し、林俊雄氏を代表として三菱財団の助成金を得て、1999年、オラーン・オーシグI遺跡の調査を開始した。この遺跡はロシアのV. V. ヴォルコフとE. A. ノヴゴロドヴァがオーシギーン・ウブルという名で報告した遺跡であり、鹿石研究の上で一つの標準とも考えられる重要な遺跡である。調査はモンゴル国科学アカデミー歴史研究所との共同調査で、歴史研究所の青銅器時代の専門家であるD. エルデネバートル氏と共に発掘を行った。

この遺跡はモンゴル中西部の北側、フブスグル県の県庁所在地ムルンの西側20 kmほどのところに所在する。セレンゲ川に西から流入するデルゲル・ムルン川の北岸で、オラーン・オーシグ（「赤い肺」の意）という山の東側である。ここには大小約15基ほどのヘレクスルと14個の鹿石があるが、ヘレクスルは遺跡の北部に多く、鹿石は3個と11個の2群に分かれて、遺跡の南部に見出される。また板石墓もここに1基あり、またすぐ近くに数基見出される。

我々がこの遺跡を調査の対象として選んだ理由は、ここにモンゴル青銅器時代の主な遺構と考えられる鹿石とヘレクスルが共に存在するからであり、その2種の遺構の関係を捉えるのに適当と考えたからである。

1999年の調査においては、まず遺跡全体の測量を行った。ヴォルコフ・ノヴゴロドヴァの報告では、個々の鹿石についての記述や図は詳細にわたっているが、ここに所在するヘレクスルのことはあまり触れられておらず、その位置も正確には表されていないからである。またオラーン・オーシグ山の周囲を巡り、一般調査を行った。その結果この山の周囲には10箇所及ぶヘレクスル群があることが判明した。我々の調査する遺跡はその一つであり、また鹿石を伴う唯一の遺跡でもある。また山のウブル（南）というよりはむしろ東に位置している。調査に当たってはその全体的な立地を前提とする必要があると考え、この遺跡をオーシギーン・ウブルではなく、オラーン・オーシグIと呼ぶことにした。

また遺跡の北部にある第1号ヘレクスルの調査を開始した。このヘレクスルには、中央の積石塚の周りの方形の石列による囲いと、その東側を囲むように構築された21基の石堆が付属している。方形の囲いの四隅には石堆がある。積石塚の直径は12～13 m、高さは2 m弱である。積石塚からは東方へ触角状の張り出し部が延びている。この時の調査では、時間の関係で積石塚の本体には手をつけず、積石塚につながる張り出し部、石列による方形の囲い、主に東側に位置する石堆をその構築面まで清掃して土を除去した。

この地域では堆積した地層は極めて薄い。典型的な地層は、表土の下に黒色土層があり、その下に黄褐色土層があって、その下が地山となるというものである。このヘレクスルに付属する触角状張り出し部、石列による方形の囲い、主に東側に位置する石堆などは基本的に黄褐色土層の上にあったが、所により地山に直接載っている場所もあった。この遺跡では現在でも地山の露出している場所が時折見られるが、遺構が地山に直接載っている個所では、おそらく構築当時、地山が露出していたのであろう。

積石塚東側の触角状に見えた張り出しは、清掃の結果、その北側はほぼ長方形を呈し、南側は大きな弧を描いて南から北へ延び、方形の石列の東辺に重なった後、わずかに西方へ延びていることが分かった。

東側を中心として配置された石堆は、積石塚に近い内側には大型の石堆が並び、外側には小型のものがある。一つ一つの石堆は、周りを大きな石で囲んで外形を形成し、その内側に石を積んでいる。底に小型の角礫が敷かれているのが見えるものがあった。その場合、小型の角礫を敷き詰めた上に大型の石で外形を作り、それから石を積んだことになる。

石堆のうち南側のもは多く攪乱を受け、中心の石がなくなっているものがあった。清掃の際、その5基の石堆の下から馬の骨が発見された。頭骨のみが2例、頭骨と頸椎が3例である。ほかに蹄や尾骶骨が発見されたところもある。頭骨は鼻面を東に向けて置かれ、頸椎はその下か上に並べて置かれていた。

方形の石列の四隅には石堆がある。その1基、東北隅のものを断ち割りによって調査した。しかし小さな獣骨片が1片出土しただけで、他には何も出土しなかった。

遺跡の南部、鹿石の周りにはストーンサークルが多く見られる。このシーズンは第4号鹿石の周りに調査区を設定して発掘した。発掘によりストーンサークルが8基と小土坑1基が検出された。ストーンサークルは大き目の石を並べて外形を作り、その内側に礫を敷いている。礫は時折外形の大型石の外にはみ出ており、石の積み重ねが内側にない点を別とすると、第1号ヘレクスル東側の石堆と、構造上よく似ている。ここでも馬の頭骨と頸椎の組み合わせが発見された。馬の鼻面は東に向けられており、その点でも共通する。

1999年の調査によって明らかになった重要なことは、ヘレクスルに付属する石堆と、鹿石付近のストーンサークルに、どちらも同じ儀礼による馬の頭骨・頸椎の埋納が発見されたことである。石堆とストーンサークルの構築法もまた類似しており、どちらも同じ時代に同じ民族が作ったものと考えるのが自然と思われる。ヘレクスルと石堆の関係、ストーンサークルと鹿石との関係などをさらに確認する必要はあるが、この結論が動かなければ、今まで明らかでなかったヘレクスルの年代について、大きな手がかりが得られたことになるであろう。

またこのシーズンには、現存する14本の鹿石の全ての面の拓本を採った。

3. 2003年の調査

1999年の調査による成果を受け、2003年から高濱秀を代表者として、科学研究費補助金（基盤（B））による調査をオラン・オーシグ I において開始した。1999年と同じくモンゴル国科学アカデミー歴史研究所との共同調査で、エルデネバートル氏と共に発掘を行った。

初年度に行った主要な調査は、第1号ヘレクスルの中心部分である積石塚の発掘である。全掘するには時間が足りなかったため、初年度は南半分の石だけを除去することとした。それに加えて作業員の手が空いているときに東側石堆の調査を続行し、13基の石堆を発掘した。

1号ヘレクスル積石塚南半分の発掘は、3段階に分けて行ない、それぞれの状態を記録した。1. 表面の石の間の土を取り去った状態、2. 中途まで石を除去し、石のあいだの土を取り去った状態、3. 地上第1層目の石、である。

地上第1層目の石は、上から見ると同心円状を呈していた。これは積石塚が全体として下から順に積み上げていったというよりは、中央の核の周りに石を付けるようにして大きくしていったことを示していると思われる。それらの大部分は地山の上に置かれていたが、場所によりその上の黄褐色土層の上にあった。これは当時の地表の状態によるものと思われる。断面（東西セクション）を見ると、中央に大きな石が使われているが、石棺は南半分には見出されなかった。

積石塚東側の張り出し部基部の一部を除去して、張り出し部が積石塚と同じ層位の上にあることを確認した。

積石塚の元来の縁辺部を確認する作業中に、南側縁辺に接して鹿石を1個発見した。これはこの遺跡の南部にあるような鹿石とは形式的に異なり、小型で表面が磨かれておらず、図像も円形が2つ刻まれただけのものである。このような石も草原地帯では発見例があり、鹿石の1種とされている。この鹿石は積石塚に伴うものと考えてよいであろう。

積石塚の表面と中、そして下からも土器片が出土した。それらの多くは表面に叩き目があり、口縁

およびその下に貼り付けられた突帯に刻みがある。ザバイカリエなどに見出される板石墓文化の土器と類似している。おそらくこれらは積石塚の頂部などに置かれたものが壊れて、幾つかの破片が後に積石塚の中のほうまで入り込んだのであろう。これには恐らくタルバガンなどの小動物の活動も関連しているものと思われる。積石塚南半分を除去した下に小動物の穴が見出され、そのなかにも土器片が発見されたからである。この土器はヘレクスルの築造と同時期か、あるいはその後の時期のものであり、ヘレクスルと板石墓文化の関係を考える資料になると思われる。この遺跡でも板石墓は見出されており、その人々が、既に存在したヘレクスルの上に土器を置いたと考えるのが、一番自然である。しかし、この土器を板石墓文化に属すると決めるのも、時期尚早であろう。ヘレクスルを築造した人々の土器もまだ知られておらず、それが板石墓文化のものに類似したものであった可能性もある。

匈奴のものと考えられる無紋の土器片も、少数ながら出土した。

発掘した13基の石堆のうち、12基で馬の頭骨が発見された。それらは石堆の中心か或いは少し西側などにずれた位置で出土した。馬の頭骨は鼻面を東に向けて水平に置かれ、頸椎がその北側か南側に置かれている。2個の蹄が伴うもの、3個の蹄が伴うものがあった。4個の馬頭骨は若い馬のそれで、3個のものは牡馬のものである。

第7号石堆と第11号石堆は、その構造を知るため垂直に割って断面を精査した。第7号石堆では地山に穴を掘ってそこに馬頭骨を入れたようであり、第11号石堆では地上に馬頭骨をそのまま置いている。しかし第11号石堆でも、馬頭骨を水平に置こうとすれば、下顎骨を納める小さな穴が必要であった筈である。

石堆は次のようにして作られたと考えられる。

1. 馬頭骨と頸椎を地面に置く。時には穴を掘ってそれらを入れる。
2. 土を掛ける。
3. 小型の角礫を上に並べる。
4. その上に大型の石を円形に並べる。
5. 石をその中に置いて積む。

遺跡の南部で、第7号ストーンサークルにおいて1999年に発見された馬頭骨を発掘した。それは大きな馬頭骨で、成獣である馬のものである。鼻面を東に向け、その北側に頸椎が置かれて、3つの蹄が伴っていた。

そのほか、第1号ヘレクスルで発見された鹿石を別として、このシーズンに新しい鹿石の破片が2片発見された。

4. 2004年の調査

2004年においては、第1号ヘレクスル積石塚の北半分の石を除去した。前年と同じく、3段階において石の配置を記録した。第1層の石は南半分と同じく同心円状に並んでおり、中心近くでは、中心に向かって少し傾けるような形で豎に立てたように見える。これはやはり、中心の核部分の周囲に石を付けるようにして大きくしていったことによると思われる。しかし北西側の端に近いところでは、縁に並んだ石と内側の同心円を呈する石との間に、充填するような形で、比較的小型の石を入れているのが見られた。これは同心円の中心が、積石塚全体の円形の正確な中心に置かれておらず、少しずれていたことから起こった現象と思われる。全体の円形プランの縁の石は、作業の邪魔になるので築造の初めに置いたとは思えないが、プランそのものは予め決められており、築造のいずれかの段階で、石を置いたのであろう。

中央に石棺が発見された。全体の少し北側に寄っていたことになる。石棺は2層の大型石で作られ、3個ほどの石で蓋がされていた。第1層は4つの石からなる。内法は141cm x 72cmである。石棺の中には獣骨片と土器片が少し発見されただけで、土が詰まっており、人骨や副葬品はなかった。発見された獣骨と土器片も後から流入したのと考えられる。石棺の下にタルバガンの穴が発見された。

石棺が発見されたことから、このヘレクスルが墓として築造されたことは確かだと思われるが、

中に人骨が発見されなかったことについては、いくつかの解釈が可能である。一つはこれを象徴的な墓と考えるものである。すなわち何らかの都合で遺体を納めることができず、墓だけを作ったというものである。もう一つは、遺体を納めたのではあるが、後にタルバガンなどの小動物に骨まで食べられてしまったというものである。タルバガンにとってはヘレクスルの下の巣は安全で快適なものであろう。実際にこの第1号ヘレクスルにおいても石棺の下にタルバガンの穴があった。

積石塚の表面や中から発見された土器片は、前年と同様の板石墓文化の土器に類似したもので、前年出土のものと同接するものもあった。

積石塚を囲む方形の石列の隅にある石堆のうち、1999年に調査した北東隅以外の3基を調査した。馬頭骨は発見されず、石堆によく見られる小型角礫も見られなかった。構造も異なっているようである。

積石塚に積まれた石を除去し、元来の輪郭を検出したことにより、東側の張り出し部は、積石塚を築造した後に付け加えられたことが明らかになった。しかし後世のものか、同時期に一体として作られたかは、まだ完全には解明できない。しかしその基部は積石塚と同じ土層上に載っている。

張り出し部の上部に載った石を除去し、構築面上第1層目の石だけを残すことで、4部分が区別された。

- A. 北側の短い弧状の石列
- B. 中央の円形小石堆
- C. 積石塚に直接接する部分
- D. 南側の長い触角状部

AとDは元来楕円形を形成したと考えることも可能ではあるが、できる楕円形はいびつである。またDは、基部は規則的な石の排列を示しているが、先の方は異なっており、積石塚を囲む方形石列の南北列に重なる部分は、明らかに石列より後に置かれたものである。一時期に作られたものかどうか不明である。

Cには小型角礫が使用されており、石堆や鹿石近くのストーンサークルと共通する。

Bは、直径3mほどで、黒色土の上に載っていた。その下から、獣骨片、小玉、鉄片4枚、完形土器1個、別の土器片1個が発見された。完形土器は突厥時代の石彫に表わされた容器と類似しており、一応突厥時代のものと推定される。そしてこの円形小石堆も、ヘレクスル本体とは異なり、同じく突厥時代に营造されたものと推測される。

遺跡南部の第4号鹿石の側の第4号ストーンサークルを発掘し、鼻面を東に向けた馬頭骨を発見した。頸椎は北側に置かれていた。このストーンサークルを形成する大型石の下には小型の石は敷かれておらず、この場合は大型の石を円形に並べてから小型の石を後で中に置いたかと考えられる。

5. 2005年の調査

最終年度2005年においては、ヘレクスルが墓であることを再度証明するために小型の第12号ヘレクスルを発掘した。そのほか第4号ヘレクスル北側の第1号板石墓を発掘した。また第7号鹿石付近を調査した。

第12号ヘレクスルは、積石塚が約9mの直径を持ち、直径16mの円形をなす石列によって囲まれている。南側に小さな石堆が1基ある。

積石塚は、地山の上の黄褐色土層の上にほぼ載っていた。端部を形成する第1層の石は、中心に向かって傾くように立てられている。東側の端に近いところには突出した長い石が立てられていた。積石塚表面の中央には平面形が放射状に石が配置されているのが見えたが、それは楕円形の石棺の上部を形成することが判明した。石棺は最初に7個の石をほぼ楕円形に並べ、その横に数個の石を付けて、その上に、長方形の石を長辺が中心を指す形で、上がすばまる螺旋を描くように置いている。石棺の中には5～6歳の小児の骨がばらばらの形で発見された。石棺外でも骨は発見されているが、これはおそらく小動物の活動によるものであろう。骨の中に焼けた痕跡をもつものがあるのは注意すべきで

ある。

この第12号ヘレクスルの調査により、ヘレクスルが基本的に墓であるということはほぼ明らかになったと思われる。エルデネバートル氏によると、これはヘレクスルから人骨が出土した4例目だということである。5～6歳の小児のために、小さくはあるが1基のヘレクスルを作ったということは、このヘレクスルを築造した人々の社会を考える上に、注目に値する。この第12号ヘレクスルと第1号ヘレクスルとの構造上の差は、これがかかなり小型であることによるのであろう。第12号ヘレクスルにも同心円状の構造がある程度見られ、また第1層の石の多くが中心に向かって傾いていることは、第1号ヘレクスルと同じく、中心部から外に向かって石を付けていくような築造法が用いられたことを意味していると思われる。

ヘレクスルの北東側の端近くの石の間で鉄製の刀子が発見された。上端をまげて紐通しをつくったもので、幾分類似したものが、中国内蒙古自治区の春秋時代から戦国時代にかけての毛慶溝遺跡で出土している。しかし、ここで発見された刀子とヘレクスルとの関係は不明である。

南側の小石堆は径約3mで、ヘレクスルと同じ層位の上に載っていた。比較的大型の石からなる方形部分はその中心をなし、浅い穴の中に納まっていた。その東端の下から鼻面を南に向けた羊の頭骨が出土した。残念ながら、この小石堆と12号ヘレクスルとの関係は確認できなかった。

この遺跡で最大の第4号ヘレクスルの東北にある第1号板石墓を発掘した。その西側には第4号ヘレクスルに付属する敷石があるが、それは元来この板石墓の位置まで延びていた筈であり、板石墓はそれを壊して築造されたと考えられる。

板石墓とは板石を立てて墓域を区画し、その内側に石を置いたもので、この板石墓は長方形の南側に半円形が付いたような形をしている。立てられた石はみな上部が外側に傾いている。東西3.5m、南北4.5mである。この墓はこの遺跡のヘレクスルと同じく黄褐色土層の上に築造されていた。周りに立てられた板石は地山に差し込まれている。南側や東側では周囲の板石の外側にも石が多く見られるが、それらも黄褐色土層の上にある。盗掘の際に外へ放置されたものではなく、元来その位置に置かれていたというツビクタロフの主張が正しいと思われる。

ほぼ中央に墓壙が発見され、頭を東に向けた人骨が、ほぼ原位置で発見された。しかし小動物によるものと思われる攪乱があり、墓壙の輪郭も完全に検出することはできず、また人骨も下顎骨など、不足部分がかかなりあった。

遺物としては弓の上下に2点1組で装着する弭が1対と1点発見された。1対は人骨の腰の辺りから出土している。この種の弭は板石墓文化のみならず、晩くは中世にまで長い間用いられたものであり、これを根拠として年代を詳細に判断するのは難しい。

第7号鹿石付近を発掘した。この鹿石はこの遺跡の他のものとは異なった石質の石を使って作られた特異なもので、大きさもおそらくここでは最大と思われる。また、ヴォルコフ等はこの鹿石の図を発表しているが、現在の状態では上部の一部しか地上に見えておらず、下部は地中深く差し込まれているように見えた。それでこの鹿石を全体として確認するのが目的であった。周りの土を取り除くと、折れた下の部分がすぐ傍に浅く横たわっているのが明らかになった。その周囲を発掘すると、これは直径4mほどのストーンサークルに囲まれていることが判明した。これは黄褐色土層の上に載っている。ストーンサークルの北側には小さな石で縁取られた2m x 2mほどの石敷きがあり、これはストーンサークルの下にもぐって行くように見えた。石敷きではトルコ石に似た小さな石の破片が発見された。

発掘前から、第7号鹿石の東側に小さな石堆のようなものが2基見えていたが、発掘するにつれ、かなり大きな石堆になってきた。また南西側にも巨大な石堆と思われるものが現れた。いずれも黄褐色土層の上にあると思われる。また東側の2基の石堆の間に、鼻面を東に向けた馬の頭骨が発見された。この区域は鹿石の立て方、ストーンサークルとの関係、そして鹿石の儀礼に関する手がかりを得るのにもっとも相応しい発掘区であるが、このシーズン中にこの発掘を終わらせるのは無理だと考えられたので、この状態で埋め戻し、次の機会を待つことにした。

この遺跡では、1975年にヴォルコフ・ノヴコロドヴァが南部で15個の鹿石を報告している。し

かし1979年にツェヴェンドルジが報告したのは14個の鹿石であり、我々も1997年に踏査に訪れた時以来、14個の鹿石しかここでは見ていない。第15号鹿石が行方不明になっていたのである。ところが今回ムルンのフブスグル・アイマク博物館に鹿石があると聞いて見せてもらおうと、それが第15号鹿石であることが判明した。現在2片あるが、上部と下部が欠け、中部にも欠失部がある。ヴォルコフ・ノヴコロドヴァによると、この遺跡で最も美しい鹿石とされていたのに、まったく残念なことである。

また鹿石の破片が1点新たに発見された。しかし小さすぎて、図像のどの部分に当たるかは不明である。

6. 今後の課題

平成15年度から17年度にかけて第1号ヘレクスルと第12号ヘレクスルを調査した結果、ヘレクスルが墓であることは、ほとんど確実に became といつてよいであろう。また鹿石附近のストーンサークルから、ヘレクスルに付属した石堆と同様の儀礼で埋納された馬頭骨と頸椎が出土することは1999年に既に知られていたが、その調査例を増やし、さらに確実にすることができた。これにより、ヘレクスルおよび鹿石がほぼ同時代のもので、恐らく同じ人々によって営造されたことは立証されたと考える。ただ、ヘレクスルが確かに墓であったといつても、何故人骨が見出されない例があるのか、さらに研究しなければならない。

調査の結果、今後明らかにするべき課題として現われてきた大きな問題が幾つかある。その一つは第1号ヘレクスルの積石塚南側縁辺において出土した鹿石の問題である。これは遺跡南部に立てられた鹿石とは型式を異にしており、小型、粗雑で鹿の図像もなく、単に円形が刻まれているに過ぎない。しかしこれはヘレクスルに付属したものであり、当然同時期であろう。すると、遺跡南側の鹿石とも、型式は異なるとはいえほぼ同時期の産物ということになる。ヘレクスルの傍らにこの種の鹿石が伴う例は、我々の巡検においても数例確認されており、またアルタイにおいても出土例がある。2つの型式の差が何を意味するのか、さらなる類例の増加を待つて判断したい。

これに関連して、今までに発見された鹿石のデータを保存することも必要であろう。1999年に全ての鹿石の全面的拓本が採られているが、それとは別に現状記録として三次元のデータをデジタル化して残しておくことも必要と思われる。この遺跡はモンゴルでもよく知られた遺跡であり、観光地にもなりつつあるので、急速に破壊が進むことが懸念される。早いうちにその作業を行わなければならない。

平成17年度に調査した第7号鹿石附近では、発掘の結果、かなり大型になると思われる石堆の存在が明らかになった。この遺跡では後世の地層の堆積は全体にきわめて薄いと考えていたが、この場所では意外に厚く、鹿石とストーンサークルや石堆が築造された当時の景観が、現在とはかなり異なったものであった可能性がある。鹿石附近に築造されたストーンサークルや石堆については他に報告が数例あるものの、それらはほとんどが現在の地表からの観察や図である。構築面まで発掘した形で、元来どのような状態に営造されたかを調査した例はない。鹿石遺構の意味を探る上でこれは必須のことであろう。次の機会を与えられれば、その調査を継続したい。

またオラン・オーシグ山を囲んで、併せて10箇所にのぼるヘレクスル群があることが、1999年の一般調査によって明らかになっている。2003年度の科学研究費補助金の申請時には、その全体の測量を考えていたが、これにはかなりの時間と人員が必要であり、今までその機会を得なかった。しかしこの地域の青銅器時代の全体像を明らかにするために、必要な作業であることは確かである。